

吉川英治著「宮本武蔵(二)」吉川英治文庫 49、講談社、1975年6月2日刊を読む

開倫塾

塾長 林明夫

——ふとその時、彼の片方の足を見ると、足の甲を布で縛っていた。歩むには少し跛行<sup>びっこ</sup>をひいている形である。

足の裏の傷<sup>う</sup>が膿んでいるのだった。それゆえにきょうは馬の背を借りて歩いているものとみえる。

彼は今、自分の体というものに対して、日々、細心<sup>いた</sup>な処<sup>むげ</sup>わりを施していた。そうした注意を抱いていたに関わらず、鳴海港の混雑の中で、釘の立っている荷箱の板を踏みつけてしまったのである。昨日から傷に熱を持って、足の甲は樽柿<sup>じば</sup>のように地腫れがしていた。

(これは、不可抗力な敵だろうか?)

武蔵は、釘に対しても、勝敗を考えるのだった。——釘といえども兵法者として、こういう不覚をうけたことを恥辱に思うのだった。

(釘は明らかに、上を向いて落ちていたのだ。それを踏みつけたのは、自分の眼が、虚であって、心が常に全身に行き届いていない証拠だ。——また、足の裏へ突きとおるまで踏んでしまったことは、五体に早速の自由を欠いていたからで、ほんとの無碍自在な体ならば、草鞋<sup>わらじ</sup>の裏に釘の先が触れた瞬間に、体は自<sup>おのずか</sup>らそれを察知しているはずである)

自問自答にこの結論を下して、

(こんなことでは)

と、自己の未熟が反省され、剣と体とがまだまだ一致しない——腕ばかりが伸びてほかの体や精神は合致しない——一種の不具を感じて忌々<sup>いまいま</sup>しくなるのだった。

P346 ~ 347

<コメント>

宮本武蔵(第二巻)「水の巻(つづき)」と「火の巻」。佐々木小次郎登場。手に汗にぎる名場面が続々登場。是非、御一読を。

2024年12月18日(水)